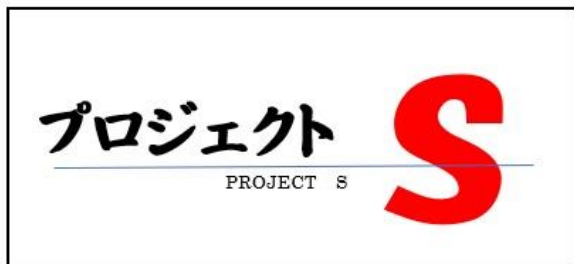


学校努力点の取組（令和5年度3学期）



**学校開放日にプロジェクト S の
学習発表を行いました。**



1年「おもちゃの工夫を伝えよう」



2年「おいでよ、自分はっ見はっぴょう会」



3年「正色学区を伝えよう」



4年「過去と今と未来と伝えよう」



5年「福祉について考えよう」



6年「6の1から世界へ レッツゴー」



ひばり組「わたしのがんばったこと発表会」

努力点の取組であるプロジェクト S の発表を参観していただきました。
自分たちが協力して準備してきた成果をしっかりと発表しようと、前向きに取り組むことができました。

研究のまとめ

研究主題が変わって3年目となる本年度は、二つの柱である「ドンドンクエスト」と「プロジェクトS」の取組を継続した。

DONDONQUEST

「ドンドンクエスト」は、昨年度と同様、算数科に絞って行い、今年度は、「ドンドンカルテ」を作成し、自由進度学習にも全学年が取り組んだ。前期を振り返ると、「ドンドンカルテ」により、児童が学習の見通しをもつことや自身の理解度やつまずきを把握することができたという点で効果があった。また、TTの教員と役割分担をしたり、児童同士の教え合いが広がったりした実践も見られた。しかし、丸付けの仕方や、児童自身に到達度を理解させること、児童が自由進度学習の進め方について理解を深めることが、後期に向けての課題となった。

九九のひょうをつくらう	p 7 1	<キュービナ> 算数 小2	1 1	九九のひょうをつくらう 九九のひょうをつくらう
九九のひょうをよこに見て	p 7 2		(12) $\frac{1}{2}x$	九九のひょうをつくらう 九九のひょうをつくらう
入れかえても答えは同じ	p 7 3		18-4 18-5	九九のひょうをつくらう 九九のひょうをつくらう
同じ答えはいくつある	p 7 4			九九のひょうをつくらう 九九のひょうをつくらう
九九のひょうをたてに見て	p 7 5	<プリント>	①-1 $\frac{1}{11}$ ①-2 $\frac{1}{11}$	九九のひょうをつくらう 九九のひょうをつくらう
九九をひろげて	p 7 6		②-1	九九のひょうをつくらう 九九のひょうをつくらう



後期を振り返ると、丸付けの仕方については、小单元ごとに丸付けを行うことで、つまずきにすぐに気付いたり、ICTを活用することで、待ち時間を少なくしたりする実践があった。また、自由進度学習の進め方についての児童の理解が深まり、学習に対する意欲が高まったり、一斉授業のみより、達成感を得られる児童が増えたりしているように思う。また、児童同士での教え合いも身に付いてきており、特に高学年では、自分に合った学習形態を選ぶことができるようになってきている。前期では、めあての設定が甘くなり、学習に集中していない児童も見られたが、後期では、単元の途中で小テストを行うことで、集中して学習する意欲が高まり、そのため学習内容の理解度が向上した実践もあった。



「プロジェクトS」は、昨年度と同様、総合や国語、学活で前期の実践を行っている。今年度は、より児童のわくわく感を高め、学習意欲につなげていく実践ができるように、代表授業者の参観を行い、職員の研さんを積んだ。前期を振り返ると、児童にとって身近なことがトピックとして設定され、児童の意欲を高めるうえで効

果的であった。また、高学年になるほど、調べ方やまとめ方への習熟が見られ、ロイノートやCanva（キャンバ）Kahoot（カフート）などのアプリケーションを使いこなす様子や、評価会議で児童同士アドバイスし合うことで、さらに良いものへと練り上げていく様子うかがえた。後期に向けて、低学年では、前期よりも教師が主導する場面を減らし、より児童主体で進められるようにすることや、効果的な評価会議の実施、高学年では、調べた内容をきちんと理解してから発表できるようにすることが、課題として残った。



後期を振り返ると、どの学年においても、タブレットPCやプレゼンテーションソフトを積極的に活用し、児童自身の活用スキルが向上している様子うかがえる。特に高学年では、自分の表現したい内容に応じてソフトを使い分けていた。今後も、今年度の高学年の姿を最終目標において、各学年の段階に応じてICTを活用できるようにしていきたい。また、学年の発達段階に応じて、「学びの履歴書」の作りを工夫したり、児童の「やりたい」気持ちを高めるように導入を工夫したりして、前期よりも児童主体で進められるようにしていた。評価会議については、特に高学年では、児童同士でアドバイスし合ってより良いものにしていくことが習慣付けられてきたと思う。

来年度については、「ドンドンクエスト」「プロジェクトS」とともに、「学びのコンパス」の流れも意識し、児童が自分の考えをもつ時間をとることに重点を置いて、実践を進めていきたい。



「ドンドンクエスト」では、例えば、問題の解き方を自分の考えと捉え、一斉授業で理解した自分の考えを友達と伝え合う活動が考えられる。今年度の実践でも見られた児童同士の教え合いが、より活発になるような工夫を研究していきたい。「プロジェクトS」では、これまで行ってきた評価会議を重点として、話し合いの前に、自分の考えや、評価会議で注目するポイントを意識できるようにすることで、より評価会議の内容が深まるようにしていきたい。低学年については、土台を育てるための学年と考え、話し合いの仕方（自分の考えの伝え方や友達の考えの聞き方）を深める実践も考えられる。

これまで積み上げてきた実践の成果を生かしながら、より精度を高めていきたい。